

近代日本の国際関係思想

平石 直昭

この講義では「近代日本の国際関係思想」をテーマとして、四月一日から七月一八日まで一三回の講義を行い、七月二五日に試験をした。

一九世紀半ばの幕末維新期から二〇世紀半ばの敗戦期までの約一〇〇年間の日本における国際関係思想の変化を、代表的なテキスト類（『脱亜論』、『大東合邦論』、『蹇蹇録』など）や、主な思想家、言論人、政治家（横井小楠、福澤諭吉、陸羯南、陸奥宗光など）の主張に即して歴史的に概観することをめざした。ここでいう「国際関係思想」は広い意味で使っており、国際秩序像、外交思想、国民的使命感、対外観などを含んでいる。

この講義で私が意図したのは、次のような点であった。一九五〇年に発表した小文で丸山眞男は二〇世紀前半の日本の歴史をふりかえり、「過去五十年の日本の歩みというものは、華々しい帝國的興隆から、その慌だしい没落と民主革命の陣痛に至るまで、その転換の急激さと

劇的起伏において、後世、おそらく世界の歴史家が最も食指を動かすテーマとなるであろう」と書いている。彼はこの稀有の歴史の実験についてなんらかの形で書き残すことを課題とした（『社会思想五十年』）

『丸山眞男集』第十六卷（二二一頁）。

関連して丸山は、近代日本が経験した変化について、いわゆるオールド・リベラルがもつ見方（単純化していえば、明治大正までの日本はよかったが、昭和になって軍部が横合いから出てきて素晴らしい遺産を台無しにした、悪いのは軍部だという見方）を批判し、近代日本の問題を、明治時代に内在していた契機の顕在化という視点から捉える必要を強調している（一九五〇年三月、座談会「日本の運命（一）興廢の岐路」での発言、『丸山眞男座談』2、一三二頁以下）。

この講義のねらいは、丸山が掲げた以上のような課題に対して、近代日本の国際関係思想の変化という思想的観点から追えることにある。日本をとりまく国際環境や国内体制は、上記一〇〇年の間に非常

に大きく変化した。そうした客観的な条件の変化と関連させながら、各思想がどんな課題に答えようとしているか、その回答の仕方や論理はどう違っているか、また使われている概念装置はどう変化しているか、などの思想的要因に焦点をあてて分析することを試みた。こうした作業を通じて、近代日本が国際社会のなかで辿った歩みを振り返り、その興隆と没落の思想的要因を探ろうとしたわけである。

こうした内容の講義を考えた背後には、いまの時代に対する私の危機感もあった。とくに戦後五〇周年を迎えた一九九〇年代の半ば以後、日本で再び排外的な風潮が強まってきているのではないかという危惧と、近代日本の国際関係思想を歴史的にたどることで、現状を批判的に吟味するための示唆が得られるのではないか、という期待である。

授業の方法としては、レジюме（A4の用紙一枚程度）と資料（数枚程度）を組み合わせて配布し、レジюмеで示した要点を口頭で敷衍し、資料に引照してそれを証明する、というやり方をとった（主題によっては、講義の概要を一〇枚程度にまとめて配布したこともある）。前回、二〇〇五年度に比較思想Aを担当した際には、ほぼ毎回A4用紙で一〇枚程度の講義概要を配布したので、今回はかなり違うやり方をしたことになる。

前回のやり方は、復習の際にたいへん役立ったという好意的な反応があった。反面、前回のようなやり方では、講義概要が手許にあるため、学生は必ずしも熱心にノートをとる必要がなくなり、真剣に講義

をきく態度が薄れがちになる。この点に関連して私が反省させられたのは、ある機会に話すことのできた脳科学者の説である。それによれば、脳の発達のためには、講義をきいて頭で理解したことを手で文字化する作業が大事とのことであり、その人は学生になるべく手書きさせるために、その人はレジюмеもごく簡単なものしか作らないのとことだった。納得できる話だったので、今回は前回とは違った方法を試みたわけである。

ただ試験の成績から判断すると、前回と今回とどちらのやり方がよかったのか、簡単に結論は出せないでいる。というのは学生の立場にたてば、講義概要が配布されて手許にあれば、試験勉強の際にそれを真剣に学習することで、講義内容に関してより正確な理解が可能になる（少なくともそのチャンスがある）のに対して、レジюмеと資料だけの場合、授業の際によく理解できなかつた点が、そのまま深められずに終わりがかねないからである。具体的な資料を通して、その背後にある豊かな思想の世界を理解することが重要なのだが、講義を聴くだけでは、それはなかなか難しいのが実情のようである。

講義であつかうトピックは、シラバス上では、大正期の石橋湛山の「小日本主義」、昭和前期の「満州国」の思想や東亜共同体論まで含んでいた。しかし実際に話してみると、講義の内容を十分に理解してもらうためには、「ナショナリズム」などの基礎概念の説明や近代日本に関する基礎知識の伝達などの面で予想以上に時間をつかうことにな

り、結局、明治末年の韓国保護国論までで終らざるをえなかった。

扱った主な論題は、他に、近代西洋の国家体系 vs 東アジアの華夷秩序観、後期水戸学の「国体」観と横井小楠の「天地公共の実理」観、福沢諭吉の「ネーション」観と東洋盟主論、樽井藤吉や陸羯南らの西洋植民地主義への挑戦、陸奥を中心とした日清戦争の思想、岡倉天心や近衛篤磨など世紀転換期のアジア主義などである。

初回の講義にはかなり多くの学生が参加したが、徐々に減少した。単位習得のためには予習・復習が必須だと強調したことが「厳しい先生」という印象を与え、また時に、樽井の『大東合邦論』のような漢文資料を使って講義を進めたことが、「ついていけない」という感じを与えたかもしれない。私としては知的な刺激を与えたいというねらいだったのだが、逆効果だったようである。なお漢文資料の扱い方については、元英語教師だったという聴講生の方から、返り点を付して読み下すやり方よりも、現代日本語に翻訳して主旨を説明する方が、若い学生たちには理解しやすいのではないか、というアドヴァイスをあとで頂いた。感謝している。最終的に受験した学生の数は二〇名で、うち不可が二〇%、優と特優があわせて二〇%であった。

社会人の参加者は三〇名で、何人かの方は、講義中、また講義が終わった後も熱心に質問された。ある方は講義の印象を「千載一遇」と評して下さった。ありがたいことである。また別の方は、講義の初めごろ「戦時中に自分は軍国少女で、戦後どのように生きればよいのか彷徨

してきた、その回答を求めてこの講義に参加した」という趣旨のことを言われ、粛然として襟を止す思いにさせられた。最終回の講義に際して「講義を聴いて、曙光がさしてきたように思う」と語られた。拙い講義で忸怩たるものがあるが、多少でも参考にしていただけたとすれば、こんなに嬉しいことはない。

教育研究支援課の田中理恵さんは、前回同様に諸般の準備にあたられ、万事遺漏のないように取り計らって下さった。また丸山眞男記念比較思想研究センター長の安藤信廣先生は、お忙しい日程をさいてほとんどの講義に出席され、講師を鼓舞して下さいました。お二人に厚くお礼申し上げます。(二〇一〇・一・一五)

東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター公開授業のご案内

当センターでは 2005 年度から、丸山眞男並びに広く比較思想を講ずる科目として「比較思想 A」「比較思想 B」「総合講座・比較思想 A」「総合講座・比較思想 B」の 4 科目（半期完結）を設置しております。そのうち、2008 年度は、前期「比較思想 B」、後期「総合講座・比較思想 A」を開講し、学部学生とともに学外の方々にも公開いたします。下記の要領にて前期の受講者を募集いたしますので、ご案内いたします。

2008 年度前期「比較思想 B」

近代日本の国際関係思想 講師：平石直昭（東京大学名誉教授）

授業概要

19 世紀半ばの幕末期から 20 世紀半ばの敗戦期まで、約 100 年間の日本における国際関係思想の変化を、代表的なテキスト類、主な思想家や言論人、政治家の主張などに即して歴史的に概観する。ここでいう国際関係思想には、国際秩序像、外交思想、国民的使命感などを含む。それぞれの思想が答えようとしている課題、応答の仕方と論理、使われている概念装置などを歴史的条件の変化との関連において分析する。これらの検討を通じて「国体論」「アジア主義」などの言葉の意味変化を跡付けるとともに、欧米世界を中心に形成された近代的な国際関係思想が東アジアの国際関係にどのように適用され、どんな反響や結果を生んだか、またその経験から戦後日本は何を学んできたかを検討する。

期 間 2008 年 4 月 11 日 ～ 7 月 11 日（5/23 は授業なし・全 13 回）

時 間 毎週 金曜日 3 時限目（13：15～14：55）

会 場 東京女子大学（教室は当日正門付近の掲示板でご案内します）

対 象 原則として 18 歳以上の男女

定 員 30 名

受講料 10,000 円

テキスト代等は含みません。なお、一度納入された費用は返却いたしませんので、ご了承下さい。

【申込方法】 下記の申込用紙にご記入のうえ、3月 13日（木）までに教育研究支援課宛にご郵送ください（必着）。

【結果通知】 3月末までに結果通知はがきをお送りいたします。申し込み多数の場合は、抽選の上受講者を決定いたしますので、あらかじめご了承ください。

【受講手続】 受講を認められた方は、10,000円の郵便為替を郵便局でお買い求めの上、教育研究支援課宛にご郵送下さい。（郵送期限は結果通知に記載いたします。）
なお、受講証は授業初日にお渡しいたしますので、結果通知はがきを当日会場にお持ちください。

請求・送付先： 〒167-8585 東京都杉並区善福寺 2-6-1
東京女子大学 教育研究支援課「公開授業」係
TEL： 03-5382-6453
月～金・9時～17時（11:25～12:25を除く）

【ホームページ】 <http://office.twcu.ac.jp/support/>

【その他】 後期は7月頃に募集します。
授業の単位は認定されませんので、あらかじめご承知おき下さい。

下記にご記入いただいた個人情報は、当該公開授業の運営のみに利用いたします。

-----キリトリ-----

2008年度 丸山眞男記念比較思想研究センター公開授業 受講申込書

ふりがな 氏名		年齢		性別	男・女
住所	〒				
電話番号					
受講の動機					

東京女子大学 丸山眞男記念比較思想研究センター